



Title	極限語の程度修飾について
Author(s)	田岡, 育恵
Citation	Osaka Literary Review. 1997, 36, p. 130-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

極限語の程度修飾について

田 岡 育 恵

1. 序

Turton (1995) は (1)、(2) を非文として挙げ、正しくは (3)、(4) のよう
でなければならないと述べている。

- (1) * The most ideal way to learn English is to go and live in
England.
- (2) * My brother loves music very much.
- (3) The ideal way to learn English is to go and live in England.
- (4) My brother loves music.

(1) がおかしいのは、ideal にはその単語の意味として既に最上級の意味が入っ
ているからであり、(2) がおかしいのは、love にはその動詞の意味として
very much の意味が入っているからだと説明されている。つまり、これら
の語は、最上級や very much のような程度表現で修飾することが出来ない
ということである。

Leech and Svartvik (1975, 1994²) も、(5) のような表現を示して、こ
のように limit word が scale word に転換されることがあるが、これを非
論理的な悪い英語だとする意見があると述べている。なお、小論では、limit
word を極限語、scale word を段階語と訳して用いることにする。

- (5) too perfect, rather unique

これは、「完全な」とか「独自の」という極限を表す語に「～過ぎる」とか

「かなり」といった程度を表す表現は相容れないということである。unique については、Longman の *Dictionary of English Language and Culture* (1992) も (6) のように述べているし、Quirk *et al* (1985) も unique は強意語や比較で修飾出来ないと考える話者が多いと述べている。

- (6) Many people think it is incorrect to use expressions like “almost unique”, “fairly unique” etc. since they suggest that *unique* does not mean “the only one.”

しかし、Leech and Svartvik (1975、1994²) は (5) のような表現を非論理的で悪い英語であると断わりながらも、そのような使用があることをを認めている。また、*Dictionary of English Language and Culture* (1992) においても、次のように unique を fairly で修飾した例文が挙げられている。¹

- (7) The town is *fairly unique* in the wide range of leisure it offers.

このように極限語が程度表現と共起することはあり得るわけで、実の所、筆者がこの小論を書こうと思ったのも、次のような例を目にしたからである。

- (8) It was unquestionably a successful marriage, as it was based on profound love of *the truest* kind. — Gavin Bantock, *English People, English Opinions*
- (9) ... and sooner or later we realized that nothing is *very permanent* in human existence. — *ibid.*
- (10) I will love you *longer than forever*. — Chareles E. King, Al Hoffman and Dick Manning, *The Hawaiian Wedding Song*
- (11) The relationships between ideas are so important in English that there is a *very complete* range of epistemic modals. — Th.

R. Hofmann and T. Kageyama, *10 Voyages in the Realms of Meaning*

- (12) You can have *the whitest* whites and dazzling colors. – James E. Purpura and Paola C. Brenzy, *In Charge 2*
- (13) Live your life to *the fullest*. – Takashi Sugimoto, *English à la carte*
- (14) Someone who can't eat another piece of cake is full. But someone who can't even finish the first piece is even *more full*. – Lawrence Schourup and Toshiko Waida, *English Connectives*

(8) は true の最上級、(9) は permanent に very が付いている。(10) では forever が比較の対象となっている。(11) では complete に very が付いている。(12) は white の最上級、(13)、(14) はそれぞれ full の最上級と比較級になっている。上述の文法書や辞書の記述に従えば、このような程度修飾は本来、出来ないはずである。しかし、(8) から (14) は全て語学または英語学の教科書にあったものであり、おかしい英語として片付けることは出来ないと思われる。これらの例には論理的には不要な余計なものが付いていることになるが、Sperber and Wilson (1986) の提唱する関連性理論からすれば、追加の処理能力がかかる場合はそれに見合うだけの伝達効果があるはずである。そのわざわざ余計なものを付ける伝達効果とはいかなるものであろうか。認知文法の考え方からしても、表現の違いは意味の違いであるはずであり、論理的には不要のものであれ、それが付いている場合と付いていない場合とでは全く同じ意味とは言えないだろう。小論では、本来、程度表現の修飾を受けないはずの極限語が何故、最上級になったり very の修飾を受けたりするのかという問題を取り上げ、そのような場合の伝達効果、意味の違いを考えてみたいと思う。

2. 程度修飾を受けた極限語の意味について

(8) から (14) では、極限語が比較級に使われたり very の修飾を受けたりと、程度表現が入っているが、これらの文の論理的な意味は程度表現が用いられていない場合と同じである。と言うのは、例えば、(9)、(10) の「永遠」という概念は「終わりなく」ということだから、longer than や very の修飾を受けたところで、それ以上長いということは考えられないし、(11) の「完全な」という概念にしても「全部揃っている、欠けているものは何もない」ということであり、それ以上の状態を想定することは出来ないからである。しかし、論理的には同じであっても 1 章で述べたように程度表現が付いている場合と付いていない場合では何らかの意味の違いがあるはずだと思われる。程度表現の付いた極限語の意味は、一体、どのようなものと考えればよいのだろうか。

まず、Curme (1931, 1958²) と Jespersen (1933) がこのような表現をどのように考えていたのかを見てみたい。

(15) more inferior, more superior, more unique, more universal,
more perfect

Curme (1931, 1958²) は、(15) のような表現は冗語ではない、何故なら何か完全なもの、独自なものに対する近接感には程度の差が考えられるからだとして述べ、Jespersen (1933) は、意味上、比較級や最上級が作れないものがそうになっている時には少し変わった意味で用いられているのであり、例えば、more perfect, most perfect の真の意味は「完全に一層近い、最も近い」ということになるのだと述べている。

Curme は近接感には程度の差が考えられるものだと言い、Jespersen はこれらは「～に一層近い、最も近い」という意味になると言っている。つまり、どちらも「完全さ」や「独自さ」にはまだ至っていないという考え方をしていると言えるだろう。しかし、言葉の上では perfect, unique と言い切って

いて、それらの語を用いているのだから、まだそこに至っていないという考え方には賛成できないように思う。極限語というのはそれ以上が考えられない状態を表すものであるが、そこに程度表現が加えられているというのなら、それは話者の表したい状況がその極限語だけでは表現し足りないということの意味するものと考えられる。極限語の持っている意味を更に強めるために程度表現が用いられたと考えられるだろう。このことについて、3章で更に詳しくみていきたい。

そもそも冗語というのは、三省堂の『新明解国語辞典』に拠れば、言わなくてもよい余計な言葉と定義されている。ここで論じている極限語に程度表現が付く場合も含めて、一見、冗語と思われるものは、論理的に考えれば表現が重なっていて、余計になっているということになるのだろう。しかし、そのように表現を重ねたことにはそれだけの理由があるものである。論理ではなく伝達機能という点で考えれば、冗語は決して無駄とは言えないように思う。次の例を見てみよう。

- (16) Emi seems to think that Tom has left, but the real truth, according to Bob, is that Tom is still there. — Lawrence Schourup and Toshiko Waida, *op. cit.*
- (17) In all three examples IN FACT is used to indicate what the “real” truth is. — *ibid.*

上の例では、the real truth という表現が見られるが、論理的には truth (真実) という名詞に real (真実の) という形容詞は余計である。しかし、日本語でも「本当の真実」という表現を場合によって全然、冗長に思わないように、この英語の表現も全くおかしいとは感じられない。論理的には、the truth というのと同じであるが、the real truth と繰り返すことによって、「真実」が強調されるのである。そして、上の例では、そのような強調が必要なのである。(16) では、エミはトムが行ってしまったと思っているらしい

が、本当は彼はまだそこにいるのだと、エミの誤解に対して真実はこうだということを強調している。(17)では、*real truth* と表現を重ねるだけでは足りないようで、更に *real* を引用符で囲って強調している。これらの場合、表現を重ねない場合と論理的な意味は同じであっても機能的な意味は異なるものと考えられよう。

3. 極限語の程度修飾が許される理由

この章では、極限語の程度修飾が場合によって何故可能になるのかということを考えていく。まず、比較級の例で見てみよう。

(18) Someone who can't eat another piece of cake is *full*. But someone who can't even finish the first piece is even *more full*. = (14)

(19) A *fuller* account will be given later. - 小西 (1989)

(20) The church was far *fuller* than Florentyna had expected.
- *ibid.*

(18) では、*full* は満腹だという意味になり、ケーキをもう1つ食べられない人は満腹ということだと述べた後、最初の一切れを食べ切れない人は（それより）もっと満腹ということになると述べている。ここで比較級が用いられているのは、想定される2人の人の満腹度を較べているからである。*full* は本来、入れ物が一杯になっているということを表すものであるが、この場合の満腹度の一杯という判断は、客観的な基準によるものではなく主観的なものである。従って、その判断は主観に応じて様々であり、また変更可能なものと考えられる。もっと *full* だと思ふ対象が出てくれば比較級にすることが考えられるのである。(19)では、後でされる説明の方がもっと中身が詰まっているということで、2つの説明を較べているし、(20)でも、予想していたよりも一杯であったということで、やはり比較の対象がある。これらの場合、

極限語の比較がどうして可能になるかという、比較の対象が出てきたからであり、それは極限語を使用するに至った評価の判断がこれらの場合、主観的なものだからである。

次の(21)から(24)の比較級は、もっと完全なものは今までに知らなかった、想像できないということで、特定の何かとの比較ではなく過去を振り返っての、あるいは、想像できる限りの全てに対象の幅を広げていて、意味的には(25)から(30)の最上級の用法に等しいものである。

- (21) I have never seen a *more complete* investigation.
 - 小西、*op. cit.*
- (22) A *more complete* failure than this couldn't be imagined.
 - *ibid.*
- (23) It is difficult to imagine a *more perfect* economy of drama.
 - *ibid.*
- (24) A *more perfect* spot for a picnic could not be found. - *ibid.*
- (25) It was based on profound love of *the truest* kind. =(8)
- (26) You can have *the whitest* whites and dazzling colors. =(12)²
- (27) Live your life to *the fullest*. =(13)
- (28) Why does grandmother always give you *the fullest* glass of orange juice? - 小西、*op. cit.*
- (29) I'll cooperate to *the fullest* extent. - *ibid.*
- (30) In the hollow stood a newly completed house of *the most perfect* proportions. - *ibid.*

これらの例で極限語の最上級を使うことができるというのも、その状態の判断が客観的な基準に基づくのではなく主観に基づくものだからだと思う。

極限語を比較級にしたり最上級にしたりするというのは、極限状態に幅を認めるということであるが、そのような現象は次のような段階語の最上級の用法にも当てはまるものと思う。

(31) Tokyo is *one of the biggest* cities in the world.

big は段階語だから、最上級になっても別におかしくはない。しかし、one of と共起しているので、「1番大きい」と言っても唯一のものを想定しているのではなく、「1番大きい」と考えられる都市をいくつか想起して、その中の1つと言っているのである。他との対比で「最も～である」と表現されるものは唯一のものである筈だが、one of が付くことによって、その唯一性はキャンセルされる。同様のことは、最上級に定冠詞ではなく不定冠詞が用いられている次のような絶対最上級についても言えるだろう。

(32) She is *a most beautiful* girl.

最上級であっても定冠詞ではなく不定冠詞を用いることで、唯一性はキャンセルされる。big や beautiful は段階語であるが、最上級となればその極限を表すわけで、極限語と同じ事情になると考えられる。one of や不定冠詞を用いることで、そのように極限の状態だと判断されるものは唯一ではないということになる。唯一ではないということは、そのように判断されるものをいくつか認めるということ、対象に幅を認めるということになるだろう。幅があるということは、その幅の中で比較するという可能性を許すということになると考えられよう。そのように幅があるのであれば、最上級ではなく原級を用いればよいと思われるが、話者が自分の思うところを表現するには原級では言い足りず、最上級を用いざるを得ないということになるのだと思う。これは、程度修飾を受けた極限語の場合にも通じることだろう。

比較級、最上級以外の極限語の程度修飾の例に話を戻したい。

- (33) Nothing is *very permanent* in human existence. = (9)
- (34) I will love you *longer than forever*. = (10)
- (35) There is a *very complete* range of epistemic modals. = (11)
- (36) My heart's *too full* for words. – 小西、*op cit*.
- (37) His style of singing is *rather unique*. – *ibid*.
- (38) It is not *as unique as* you think it is. – *ibid*.

(38) は同等比較の例であるが、対象のユニークさを相手が想定していたユニークさと比較している。(34) も比較の例で比較の対象があるが、この場合、比較の基準となっているのは、forever である。ここで比較される対象は forever という言葉が表す概念そのものである。つまり、単に forever というだけでは言い足りないので、longer than を付け加えたということになり、換言すれば more forever ということになるだろう。(36) では too が用いられているが、これも単に full だけでは言い足りないということを示すものと考えられる。(33)、(35) では very が、(37) では rather が用いられているが、これらもそれぞれ形容詞が表している状態の度合を示すもので、そういった表現が使われるのも、その形容詞だけでは不十分だということを示すものだろう。

では、このように極限語の程度修飾が可能であるのなら、何故、最初に述べたように、一般に極限語の程度修飾は認められないと言われるのだろうか。確かに、極限語の程度修飾が許されない場合があるし、その理由は極限状態を表すものと程度修飾は相容れないという理屈で納得する。これは、同じ極限語であっても、その場合、場合でその極限語を用いるに至った判断が主観的なものか客観的なものかという違いがあり、その違いに困って程度修飾が可能、あるいは不可能とみなされることになるのだと思う。

例えば、小西 (1989) は、unique は「唯一の」、「独特の」という意味で

は比較変化不可であるが、「珍しい」の意味では比較変化すると述べている。「唯一の」というのは、1つしかないということで、その評価の判断は客観的に行われるものである。これに対して、「珍しい」という評価の判断には多分に主観性が入ってくるものと思われ、それで評価に幅が認められるということになるのだと考えられる。(39)は、*Dictionary of English Language and Culture* (1992)において *unique* の項目で最初に挙げられている意味 (=being the only one of its type) の例文として挙げられているものであるが、この意味の場合は比較級なしという指示が付けられている。これに対し、先に挙げた程度修飾を受けた *unique* の例(7)は、同書で *unique* の informal な意味 (=unusual) として2番目に挙げられている意味の例文である。

(39) Each person's fingerprints are *unique*. (= different from any one else's)

(39) は、人の指紋はそれぞれ他に2つとない唯一のものだと述べた文であるが、(39)の文意では「違っている」ということが言いたいことであって、指紋がどれだけ他人と違っているかという違いの度合は問題ではない。従って、程度表現が関わる余地がないと考えられるだろう。

小西(1989)は、*complete* について(40)は認められないと述べている。

(40) *a *more* (**the most*) *complete* set of dishes

これは、例えば、6枚セットの皿なら6枚よりも多くあるということは考えられないから、その上限に比較級や最上級を付けることは不可ということになるのだと考えられる。この場合、*complete* と考えられる数は1つである。(41)、(42)も同様の *complete* の例である。

(41) He has a *complete* set of Shakespeare's plays. — 小西、*op. cit.*

(42) The *complete* book has over one thousand pages. – *ibid.*

(41) はシェイクスピア戯曲全集を持っているということだが、全部揃っているかどうかは、つまり、complete な状態であるかそうでないかは客観的に分かることである。(42) は、本の頁が千頁を超えるということだが、1冊の本の頁数が場合によって多かったり少なかったりする筈はなく、頁数をどの範囲で考えるかという判断は客観的に行われるものである。この場合、the complete book として考えられる状態は1つである。このように主観を離れて客観的に評価が判断される場合には程度修飾による幅は考えられず、従って極限語の程度修飾はあり得ないということになるのだと思う。

上述の最上級に one of や不定冠詞が付いた場合も、その最上級を用いる判断は主観的なものと考えられるのではないだろうか。次の例はその類例であるが、one of + 最上級を用いることで、70年代の最も成功したグループやジョンの最も美しい感動させる歌について各人各様に様々に考えることが出来るということを認めた表現になっているものと思う。

(43) Possibly Paul's greatest achievement was the way he made Wing's into *one of the most successful* groups of the seventies.
– Alan Posener, *The Beatles Story*

(44) Years later, John wrote *one of his most beautiful and moving* song for his mother. – *ibid.*

先に挙げた(31)や(43)、(44)は(45)、(46)、(47)の間に対して答を与えてくれるものではないだろう。

(45) What is the biggest city in the world?

(46) What is the most successful group of the seventies?

(47) What is his most beautiful and moving song?

客観的にその形容詞の最上級で表されるものと判断できる場合であれば、それは唯一のものとして特定され、このような質問に答えられるはずである。one of や不定冠詞と共に使われる最上級は、その特定性、唯一性が否定されていて、評価に主観的な判断の幅を持たせていると考えられよう。

4. 結論

論理的には冗語と思われる極限語の程度修飾には、それなりの意味がある。つまり、話者が極限語だけでは自分の述べたい状況を表現しきれないと思ったから、程度表現が加えられたのである。そして、何故そのようなことが可能になるかという、今述べたことと表裏一体になるが、比較する対象、基準が話者の心の中に設定されたためであり、そのようなことが許されるというのは、極限語を使うに至った評価の判断が客観的な根拠を持たない主観的なものだからである。

注

1. この例文は uniqueのinformal な意味(=unusual)として2番目に挙げられているもので、1番目に挙げられている意味(=being the only one of its type)には比較級なしという指示が付けられている。
2. white の最上級が用いられているが、「白」というのは、薄汚れたシャツも(赤や青など他の色のシャツでない限り)白いシャツなら、洗濯したての真っ白いシャツも白いシャツということになる。このように、他の色に対して白を識別する時は white というだけで十分であり、最上級は考えられない。そのような場合が普通と思われるので、極限語の例として出した。しかし、薄汚れたシャツの白から真っ白い白まで、色としては段階が考えられ、その白さを較べる時には、比較級や最上級が考えられるだろう。

参考文献

- Curme, G. O. (1931, 1958²) *Syntax*. Heath., reprinted by Verbatim (1993).
金田一京助 (1972, 1994⁴) 『新明解国語辞典』三省堂。
小西友七 (1989) 『英語基本形容詞副詞辞典』 研究社。

- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*. Allen and Unwin.,
reprinted by Routledge. (1993).
- Leech, G. and J. Svartvik (1975, 1994²) *A Communicative Grammar of English*.
Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive
Grammar of the English Language*. Longman.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*.
Blackwell.
- Summers, D. (1992) *Dictionary of English Language and Culture*. Longman.
- Turton, N. D. (1995) *ABC of Common Grammatical Errors*. Macmillan
Languagehouse.